

(株)新興セルビック 代表取締役社長

# 竹内宏

これまでの常識では考えられなかったノート型パソコンサイズという小さな射出成形機を開発。今後、金型・成形の分野に変革をもたらすだろうと注目されている会社が(株)新興セルビック(東京都品川区)だ。社長の竹内宏さんは、研究者や技術者が集う異能集団の主宰者でもある。

聞き手・文/経済ジャーナリスト 信太隆文

「この「小ささの価値」が、ようやく皆さんにわかってもらえるようになりました。そうそう、シンガポール政府も買いに来たんですよ」

日頃、射出成形機の図体を知っていれば、このニューマシン「シー・モバイル」の価値にすぐ気づくはず。これなら都心のオフィスやマンションの一室で動かすことができる。しかも、樹脂射出成形の常識だった廃

材が出ない。省スペース、省資源、省エネ、さらには省物流コストと、そのメリットは数え上げたらきりがない。実際、ある大手電機メーカーは、すでに「自社の生産ラインに組み込む形でこの射出成形機を導入している」(竹内さん)という。ラインの横で直接部品を製造し供給する「インライン化」のコアマシンとして活躍し始めているのだ。

「創業当初は普通の金型屋でしたから受注仕事が100%。それが今では85%を自社製品が占めるまでにになりました。ここまで来るのに20年の積み重ねがありますがね」

前身は父親と興した新興金型製作所。日本の工業製品を支えてきた金型業は、その高い技術力で長い間不況に強い業種と目され、多くの優秀な中小企業を育んできた。



17年の歳月を経て完成した卓上射出成形機「シー・モバイル/C, Mobile-0610」(高さ12cm×幅29cm×奥行12cm)。写真左では、製品内部から樹脂製6面ダイスが出ているのがわかる

## 金型業界の“エジソン”がつくった 廃材ゼロの超小型卓上射出成形機





撮影／小田喜智寛

## ■竹内 宏氏 プロフィール

1946（昭和21）年、神奈川県川崎市生まれ。'71年、(有)新興金型製作所設立。'87年、(株)新興セルビック設立（'03年、新興金型を吸収合併）。'05年8月、経済産業省主催の「第1回ものづくり日本大賞」で経済産業大臣賞を受賞。昨年、「東京都ベンチャー技術大賞」優秀賞を受賞。保有特許は130件を超える（'07年12月現在）。社員数15人。「アイデア工房」のメンバーは約60人。

だが、大型生産拠点が次々と中国などに移り、ものづくりの空洞化が深刻化する中で厳しい状況に追い込まれている。中学時代から父親を手伝い、金型屋の優等生を自任するほど自らの技術に自信と誇りを持っていた竹内さん。ところが、1985年の「プラザ合意」で、その誇りが打ち砕かれた。急激な円高が、家電品など輸出産業を支えてきた金型業界を根底から揺さぶることになった。「自分の仕事に自分で値段がつけられない事態」に、竹内さんは「よしそれならば」と、この危機をバネにして本格的に自社製品の開発に取り組む決断をしたのである。

「自分のアイデアを落とし込む図面が描けて、実際に加工までできる。そんな金型屋こそものづくりでは一番いいポジションにいる。この強みを活かさないのはもったいない」

こうして竹内さんの挑戦は始まった。最初の発明はまず金型そのものの見直しから誕生した「ユニット金型」（'87年）。大型で重くなってしまいう金型を必要な型と枠に分離し、型だけを交換できるようにしたのだが、これが評判になり今日の新興セルビックを誕生させるきっかけとなった。次いで素材を押し出すスクリーンの平面化に成功（「フラットスクリーン」

'93年）。その5年後に樹脂射出成形につきものだった廃材を出さない「ホットランナー」の開発に成功。これら技術開発は60件にもおよんだ。金型屋のエジソンの面目躍如だ。そうして'04年、遂に世界最小の超小型卓上射出成形機「シー・モバイル」を誕生させたのである。

実は、この開発と併行して竹内さんは専門誌に自らの開発の経緯やシステム上の提案を定期的に投稿し続けていた。これがきっかけになって同業者や大企業の技術者、大学の研究者ら多くの専門家が集い、情報交換などを行う「アイデア工房」が誕生したのだ。この「知の人脈」はまさに竹内さんにとって鬼に金棒だ。

「私は、私の知らないことを知っている人をたくさん知っています。それが今のわが社の強みと言ってもいい。これからの課題は、自立した町工場をいかに増やすか。技術屋なら“自工具”をつくっているでしょう。あの工夫にはものづくりのアイデアが詰まっている。小さな会社でも個人でも、少しの勇気とリスクを負う覚悟があれば自立できるんです」

本業のかたわら竹内さんは今、中小製造業のものづくり力再生の指南役として、全国の中小企業グループを巡る多忙な毎日を送っている。